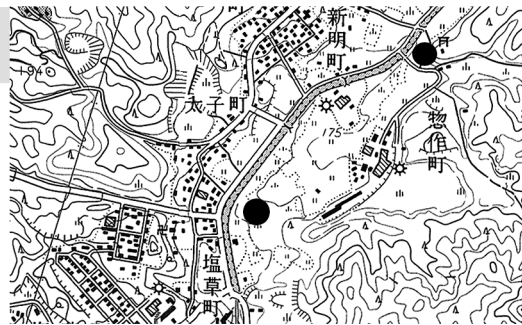


そうさく・かねば
惣作・鐘場遺跡

所在地 瀬戸市惣作町、鐘場町地内
調査理由 県道瀬戸設楽線建設
調査期間 平成 13 年 4 月～ 10 月
調査面積 5,860 m²
担当者 服部信博・宇佐見 守・藤岡幹根・織部匡久



調査地点 (1/2.5 万「瀬戸・猿投山」)

調査の経過 調査は県道瀬戸設楽線建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から実施している。昨年度の調査では、後期旧石器時代終末から近世にかけての遺構・遺物が確認され、本遺跡が断絶を伴いつつも長期間にかけて継続する複合遺跡であることが明らかとなった。

立地と環境 遺跡は瀬戸市の南東部、惣作町から鐘場町にかけて所在し、矢田川支流である赤津川左岸の南西から北東方向に形成された、標高約 165 ～ 180 m の段丘に立地する。周辺の遺跡としては、南接して太子縄文遺跡・太子遺跡が、北東の丘陵に大目神社古墳・巡間 E 窯跡・瓶子窯跡・鳳山 C 窯跡・鳳山窯跡・鳳山屋敷遺跡・鳳山 A 窯跡が、北東の赤津川右岸に八王子遺跡・長谷口遺跡がある。

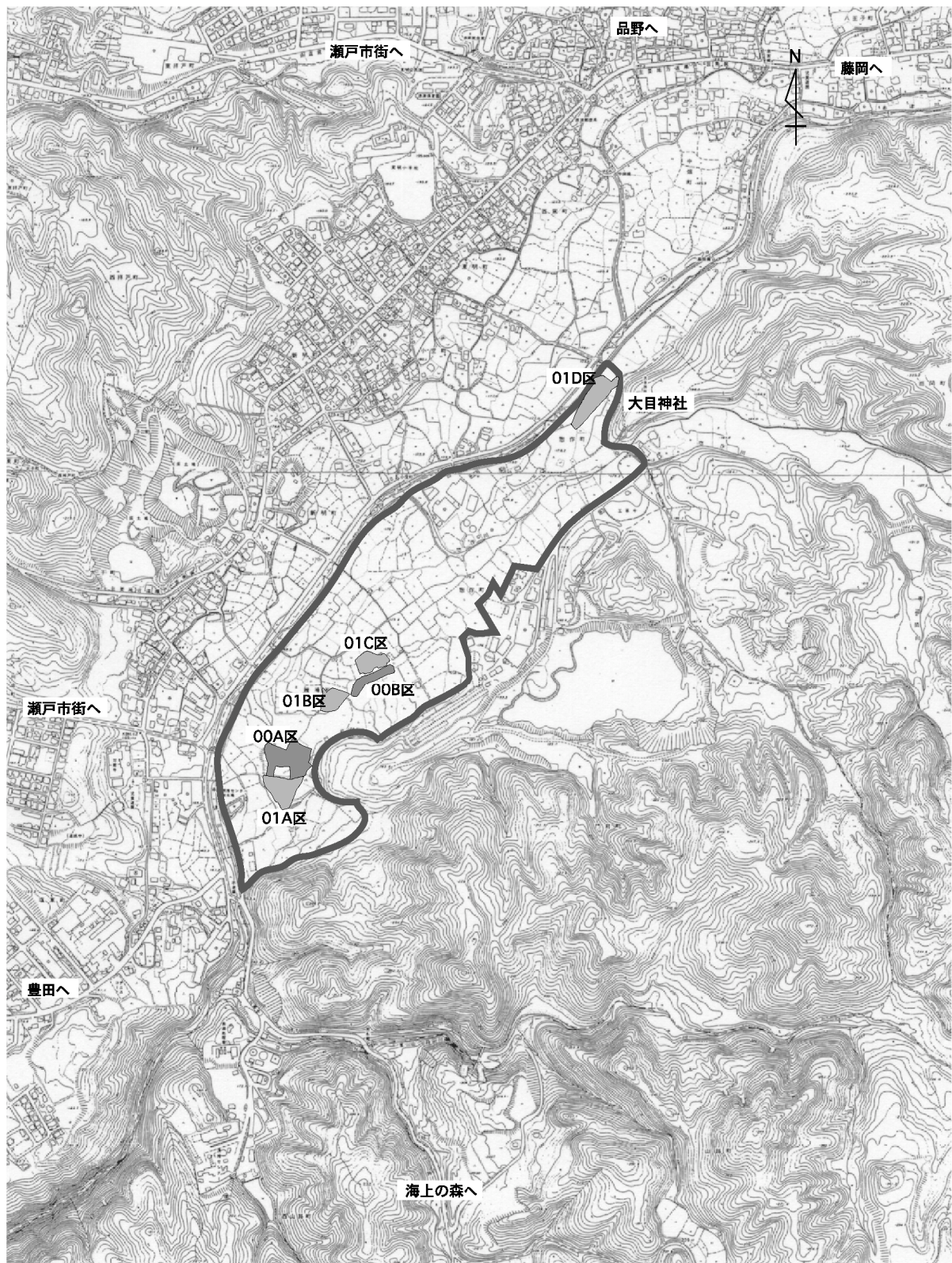
調査の概要 本年度の調査は、00 A 区の南西側に A 区、00 B 区の西側に B・C 区、式内社である大目神社が鎮座する丘陵西裾に D 区を設定して実施した。なお、D 区は廃土処理の関係から 2 回に分けて調査を行った (D a・D b 区)。

A 区 赤津川と門前川に挟まれた南北に伸びた段丘の南端にあたり、00 A 区より一段下がった場所である。後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、中世の遺構・遺物を確認した。

00 A 区との境の南向き斜面から、後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器 (木葉形尖頭器・搔器など)・剥片がまとまって出土した (S X 04)。

調査区西側段丘端で、縄文時代中期の竪穴住居を 5 軒検出した。00 A 区で同時期の住居を 3 軒検出しており、合わせて 8 軒となる。S B 01 は西側が削平されており残存状況は良くないが、直径約 3.8 m の円形をしている。明確な柱穴は未検出だが、西側を除き幅約 10 cm、深さ約 1 cm の壁溝を検出した。また、住居のほぼ中央で、一辺約 60 cm の隅丸方形をした石と土器片を併用した炉を検出した。土器片は炉の内側に二重に貼り付けられており、土器片を取り除くと中央が被熱していた。S B 02 は S B 01 の北隣りにあり、S B 01 同様西側が削平されており残存状況は良くないが、長径約 4.4 m、短径約 4 m の楕円形をしている。柱穴は楕円形をしており、柱跡と掘形が明確なものもあった。西側を除き幅約 10 cm、深さ約 3 cm の壁溝を検出した。明確な炉は未検出だが、中央北東よりで土器片が出土した直径約 50 cm、深さ約 10 cm の土坑を検出した。

調査区南西部の同一場所で S B 03 ～ 05 を検出した。S B 05 は直径約 2.8 m の円形をしている。西側を除き幅約 10 cm、深さ約 10 cm の壁溝を検出した。また住居のほぼ中央で、直径約 60 cm の円形をした地床炉を検出した。炉の中央には大型の礫が 2 個置かれ、



第1図 調査区配置図 (1:10000)

その下が被熱していた。S B 05 の直上で検出した S B 04 は直径約 3 m の円形をしている。明確な柱穴・壁溝は未検出だが、住居の中央西よりで直径約 60 cm の円形をした石囲炉を検出した。炉の中央は被熱していた。さらに S B 04 の直上で S B 03 を検出した。長径約 3.7 m、短径約 3.3 m の楕円形をしている。明確な柱穴・壁溝は未検出だが、住居内から石囲炉に使用された大型の礫の他、土器片・石鏃・剥片・小型の礫などが出土した。

調査区西側の段丘斜面の上層から山茶碗・古瀬戸製品など中世の遺物が、下層から人面付土器・搔器など縄文時代中期の土器・石器が出土した（S X 01）。

調査区中央から北側にかけて竪穴状遺構や掘立柱建物の柱穴など中世の遺構を検出した。竪穴状遺構（S K 109）は西側が削平され全形は不明であるが、東西約 3 m、南北 2.5 m 以上を測る。中から山茶碗・古瀬戸製品・伊勢型鍋などが出土した。掘立柱建物の柱穴の中には、完形又は完形に近い小椀や小皿が出土したものがあったが、それらの形式が柱穴ごと違い、建物の建て替えが推定される。

B 区 門前川に面した段丘端にあたる。飛鳥時代と平安時代前期の遺構を検出した。

調査区北東部の段丘端で飛鳥時代の竪穴住居を 2 軒検出した。S B 01 の残存状況は大変良好であった。約 5 m 四方の隅丸方形をし、北壁を除く三方に壁溝を巡らす。カマドは北壁中央に位置し、全長約 1 m、幅約 60 cm を測る。中央は被熱し、焚口周辺は炭化物が広がっていた。カマド周辺で土師器甕が出土した。なお、住居中央南よりも炭化物が広がっており、土師器片が出土した。カマドの東隣で貯蔵穴を検出した。長辺約 65 cm、短辺約 50 cm の方形をし、深さ約 36 cm を測る。周囲に高さ約 3 cm の馬蹄形の土手を巡らす。貯蔵穴に長方形の蓋をのせた痕跡も確認でき、中から須恵器高杯・蓋、土師器甕が流れ込んだ状態で出土した。柱穴を中軸より南にずれて 4 箇所検出した。他には穿孔のある砥石などが出土した。S B 02 は S B 01 の北隣にある。削平を受け痕跡を残すのみであったが、南北約 5 m、東西残存部約 2.5 m を測る。遺物の出土がなく正確な時期は不明である。

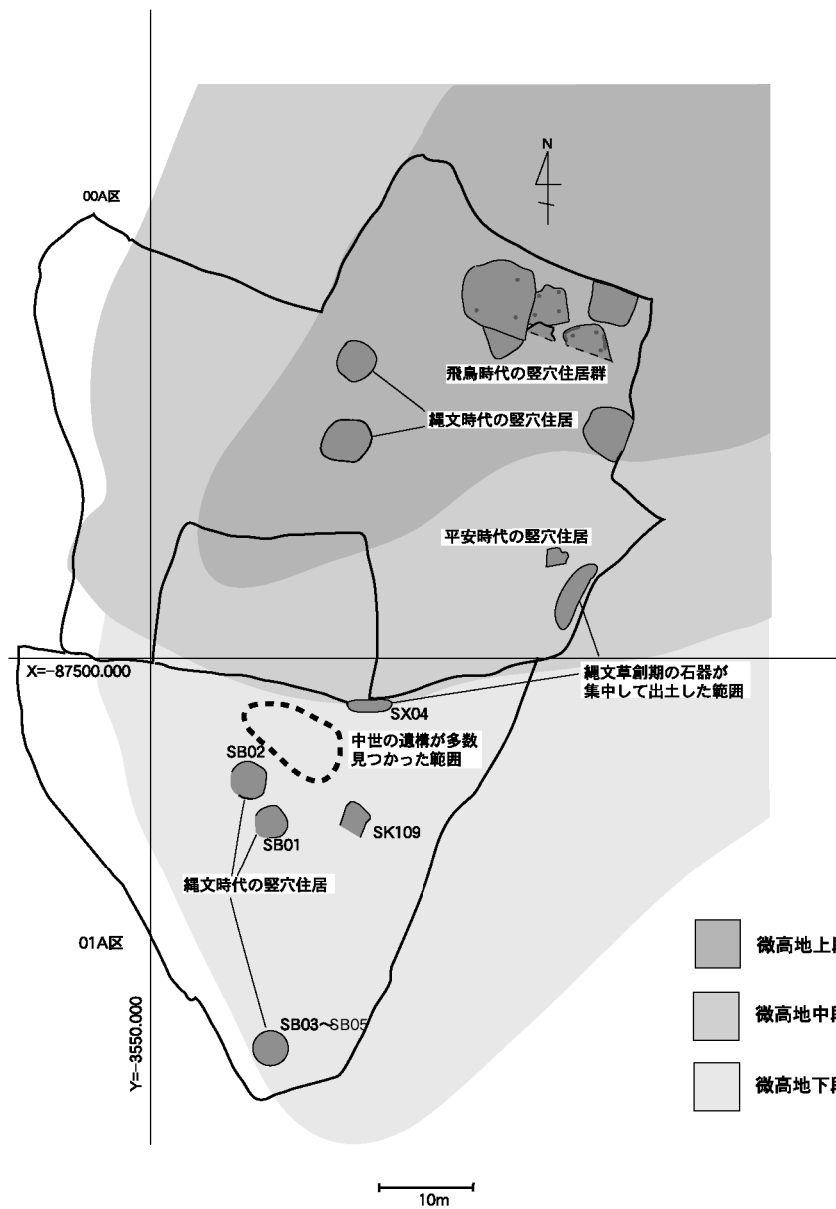
B 区は他の調査区と違い古代の遺物の出土が目立つが、この時期の明確な遺構としては、平安時代前期の大型土坑（S K 108）を調査区北西部で検出したにすぎない。西側が調査区外に続いたため、全貌をつかむことはできなかったが、直径約 2 m の不定形な土坑である。中から須恵器壺・甕、灰釉陶器平瓶などが出土した。

その他、2 条の並行する溝、ピット群、集石遺構などを検出したが、遺物の出土がほとんどなく正確な時期は不明である。また、包含層から縄文時代の石鏃、中世の山茶碗・古瀬戸製品・青磁などが出土した。

C 区 B 区の約 40 m 北東に位置し、門前川に面した段丘端にあたる。段丘下は 00 B 区である。弥生時代中期、古墳時代後期、中世の遺構を検出した。

調査区の南西部の段丘端で弥生時代中期の溝を検出した。南側は削平されているが、全長約 10 m を測る。中から弥生土器長頸壺が出土した。

古墳時代後期の竪穴住居を 2 軒検出したが、共に残存状況が大変良好であった。S B 01 は北側が調査区外に続いたため完掘できなかったが、約 5 m 四方の隅丸方形をしている。幅約 20 cm、住居外からの深さ約 25 cm の壁溝と柱穴を 3 箇所検出した。須恵器■、土師器甕などが出土した。S B 02 は調査区中央、S B 01 の南西約 3 m にある。約 6 m 四方の隅丸方形をし、北壁の大部分と西壁南側を除き壁溝が巡っている。壁溝未検出の西壁南



第2図 00A・01A区主要遺構配置図 1:800



01A区全景



01A区 SB01・SB02 検出

側に出入り口があったと推定する。住居の埋土に大量の灰が混入していたことと、住居内から轆（ふいご）の羽口が出土していることから、住居またはその周辺で鍛冶が行われていたことが考えられる。他の遺物として須恵器杯蓋、土師器高杯・甕などが出土した。

中世の遺構は山茶碗などを含む土坑群を調査区東側で検出した。また、調査区南東部は自然流路の一部となっており、中から古墳時代から中世にかけての遺物が出土した（S X 01）。その中に底部に印花が施された山茶碗が出土しており大変珍しい。

他には耕作土から後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。

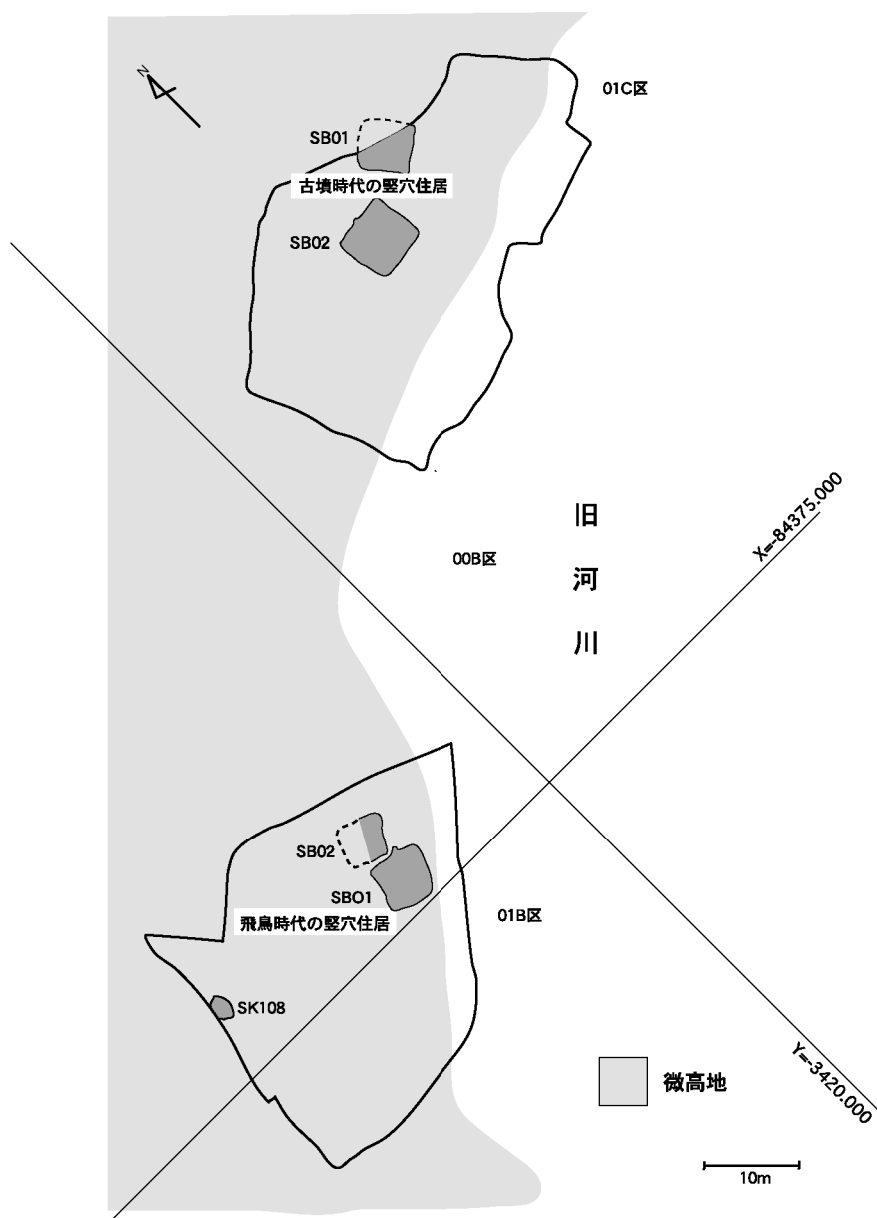
D 区 大目神社が鎮座する丘陵と赤津川に挟まれた段丘にあたり、調査前は3段の段差のある水田であった。調査の結果、縄文時代中期の遺物包含層、古墳時代後期の竪穴住居6軒・掘立柱建物1軒などを検出した。

下段は北西部で中世の遺物が出土した程度であったが、中段は縄文時代中期の遺物包含層が良好に残存していた。竹管文を施した土器片の他に、石鏃・磨製石斧・打製石斧・石匙などの石器が出土した。明確な遺構は未検出だが、居住域は遺物の出土範囲から推定して、神社のある丘陵上か、その真下あたりにあるものと推定される。

上段は南東部で古墳時代後期の住居群を検出した。水田造成時に削平されたり調査区外に続くため全貌がわかるものは少ない。S B 01は調査区中央東側にある。約5m四方の隅丸方形をし、東壁に沿って幅約40cm、深さ約10cmの壁溝を検出した。カマドは北壁中央に位置し、全長約1.6m、幅約1mを測る。中央は被熱し、焚口周辺は炭化物が広がっていた。貯蔵穴はカマドの東隣にあり直径約50cmの円形をしていた。住居内から須恵器高杯・蓋、土師器甕、土製勾玉、鉄鏃などが出土した。S B 01は2間×2間の掘立柱建物により破壊されているが、竪穴住居から掘立柱建物への建て替えが推定できる。

他の住居は狭い範囲に重複して検出された。S B 02はS B 03に切られる。約6m四方の隅丸方形をし、北壁を除く三方に幅約30cmの壁溝を巡らす。カマドは北壁中央に位置し、被熱部分を検出したが、残存状況は良くない。中から土師器甕などが出土した。S B 03は南側が調査区外となる。約4m四方の隅丸方形をし、壁溝、カマドは未検出である。中から須恵器が出土した。S B 04も南側が調査区外となる。検出長東西約4m、南北約2.4mである。カマドは北壁位置し、全長約1.5m、幅約1.5mを測る。被熱部分を検出し、中から土師器甕が出土した。S B 05はS B 04・06に切られるが、南北約5.5m、東西残存部約2.8mの隅丸方形をしている。壁溝は未検出だが、柱穴を2箇所検出した。カマドは北壁付近に位置し、被熱部分を検出したが、残存状況は良くない。中から土師器甕などが出土した。S B 06も南側が調査区外となる。検出長東西約1.5m、南北約3mを測る。中から土師器が出土した。住居は調査区南東部に集中し調査区外に広がる。大目神社古墳を築いた人々の集落と推定される。

ま と め 本年度の調査は昨年度の調査成果をさらに深めるものとなった。特に縄文時代中期の竪穴住居を昨年度と合わせ8軒検出したことは、この時期の住居の検出例が愛知県西部では少ないだけに好資料となろう。また、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居は、昨年度と違い残存状況が良好であった。総数も17軒となり、この時期の集落が赤津川左岸の段丘上に広く展開している可能性が高い。（宇佐見 守・藤岡幹根・織部匡久）



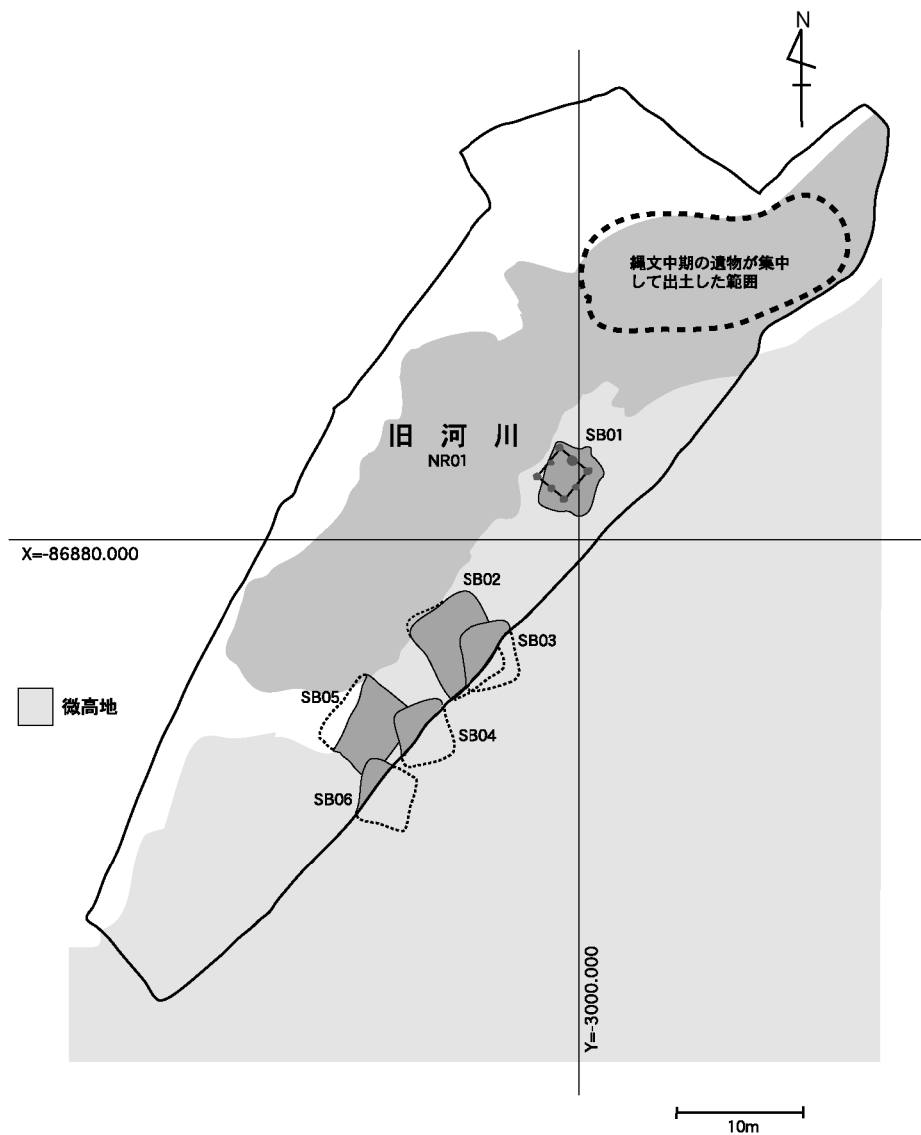
第3図 01B・01C区主要遺構配置図 1:800



01B区全景



01B区 貯蔵穴遺物出土状況



第4図 01D区主要遺構配置図 1:600



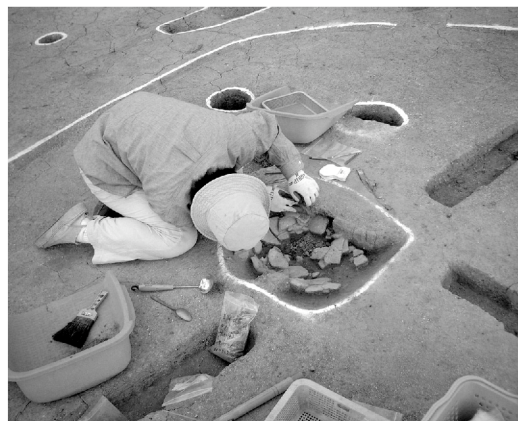
01Da区 SB01



01Db区 竪穴住居群



01A 区 SB02 炉 出土状況



01A 区 SB02 炉 作業風景



01A 区 SB03



01A 区 SB05



01C 区 全景



01C 区 ■ 出土状況



01C 区 SB02



01C 区 鞆の羽口出土状況